

福音書のユダヤ人——歴史か物語か

前川 裕

1. 序

1-1) 問題設定

現存する正典の4福音書には、ユダヤ人が多数現れている。イエス物語においてこれらの人々は時にイエスに賛同し、また受難物語ではイエスを十字架へ掛けようとする。このような福音書の記述は、歴史的事実を反映しているのか、それとも物語の中で虚構的に描かれているものであろうか。

1-2) 考察の範囲

福音書における「ユダヤ人」とは、どのようなものであろうか。もちろんイエスも「ユダヤ教的なものを信じる者」(宗教的定義)、また「ユダヤの地で生まれ育った者」(民族的定義)という意味では「ユダヤ人」となる。また弟子たちも「ユダヤ人」である。明らかに異邦人として述べられている者を除いて、福音書の登場人物のほとんどは「ユダヤ人」ということになるであろう。

福音書には実質的にユダヤ人を表す表現が複数見られる。ヨハネ福音書においては「ユダヤ人」(*Ioudaioi*)が多用されているが、共観福音書においては用例が少ない¹⁾。これはそれぞれの福音書が好む表現があるための現象であるが、それゆえに「ユダヤ人」という表現のみを取り上げると偏りが出る恐れがある。また福音書では、概してユダヤ教指導者層やファリサイ派はイエスに敵対する人々として描かれているといえるが、「ユダヤ人」はそれらの人々に限らないものであるから、もう少し広い範囲で見る必要がある。

ここでは、イエス、イエスと同じ位置にあると見なせる弟子たち、異邦人である人々を除いた、ユダヤの地で生きる人たちを対象として考えることとする。

1-3) 研究史

各福音書の記述をもととした「ユダヤ人」についての研究は数多い。特に *Ioudaioi* については、ヨハネ研究者により多数の研究が重ねられている²⁾。また次に述べる物語批評の方法を用いた福音書研究も近年増加している³⁾。ただし、物語研究の方法を用いて

各福音書の特定のテーマを比較したものはほとんど見当たらず、今回のテーマとした「ユダヤ人」についての比較研究も管見の限り見いだせない。

1-4) 方法論

ここでは、物語批評 (Narrative Criticism) の方法論を用いて分析を行う。この手法では、文書の背後にある歴史を一度括弧に入れ、本文そのものから読み取れる内容を考察する。伝承史・編集史等の歴史的手法は、文書の背後にある歴史的状況や著者の思想について考察する上で大きな成果を上げている。福音書から見いだせるイエス時代の「ユダヤ人」の状況についても、多くの研究がなされている。この場合福音書テキストは、テキストの向こう側を覗くための窓のような働きをしていることになる。これに対し、物語批評を含む文芸学的方法はテキストそのものから読みとれる内容に注目する。「著者の意図」を第一義に求めるのではなく、まずテキストの語るものを探ることを目指す。ただし著者の意図を全く放棄する必要もないと言える。完全なフィクション(創作)ではなく、一定の歴史的背景を含んでいると考えられる福音書の分析では、テキスト分析によって得られた情報を再び歴史的考察に還元することがより望ましい。文芸批評的な手法は歴史的手法と断絶するのではなく、歴史的手法と協力しつつ、テキストのメッセージを探ることを目指している⁴⁾。

分析項目として、Structure/Form (構造/形式)、Rhetoric (レトリック)、Settings (状況設定)、Characters (登場人物)、Point of View (視点)、Plot (筋書き) の6項目を設定する。これらは物語分析において標準的項目と考えられるものである⁵⁾。

2. テキストと分析

分析のための聖書テキストとして、現在における最新の標準的本文と考えられる Nestle-Aland 27版⁶⁾ を用いる。なお本研究のテーマとの関係で、Characters の分析が中心となることを予めお断りしておく。

2-1) マルコ福音書

マルコ福音書において登場する「ユダヤ人」には、以下のような名称が与えられている。「律法学者」「ファリサイ派の律法学者」「ファリサイ派」「祭司長」「サドカイ派」「大祭司」「長老」、そして「群衆」「大勢 (の人々)」がある。

Structure/Form

マルコに限らず、福音書において「ユダヤ人」が登場する場合には基本的に対話形式となっている。前半では、まずイエスの言動があり、それに対して「ユダヤ人」たちが意見・反論をなし、それに対してイエスが答える、という形式をとる。後半では逆に「ユダヤ人」たちからイエスに議論を投げかけ、それに対してイエスが答えるという例も見られる。このような対話は臨場感を増し、また対立点を明確にする効果があると考えられる。

Rhetoric

「ユダヤ人」のうちいわゆる体制側に属する者たちは、基本的にイエスに対する否定的反応を示している。ただし稀に、イエスに肯定的な答えをしている例もある（12：28）。このような同じ行動の繰り返しは、一連の行動（sequence of actions）の一種であり、同じ行動が繰り返されることによって「ユダヤ人」たちの執拗さが示され、また読者内部でのステレオタイプが強化されていく効果がある。

Settings

「ユダヤ人」との対話の場面は多岐にわたる。最初はイエスの奇跡場面に（たまたま）律法学者が居合わせた、という形であるが（2：6、2：16、2：24）、物語が進むとイエスを目指してやってくる（7:1 など）。さらに、単にイエスの話を聞くためだけでなく、反論しようとする（8:11）。

Characters⁷⁾

福音書物語の中の「ユダヤ人」は、必ずしも同質の人々ではない。「群衆」「大勢」として言及されるものたちは、イエスの業や言葉に驚き、賛同することも多い。イエスの言葉の中で「ユダヤ人」たちに言及される場合、それらは「律法学者」「祭司長」「長老」である⁸⁾。これらはいずれも当時の社会のリーダー的な立場にあった人々と考えられる。登場人物の内面についてはほとんど語られない。またすでに3：6において、イエスを殺す相談が始められているので、読者はこのような前提のもとに読み進めることになる。また12：13「イエスの言葉尻をとらえて」という表現によって、言葉の裏にある悪意が明確にされている。

「群衆」として言及される人々は、民の長の位置にあるのではない、「その他大勢」と見なすことができる。「群衆」と「大勢」の間には実質的な違いはない。ただしマルコにおいては、8章まではイエスの活動地はガリラヤであり、そこで言及されている「群

衆」を「ユダヤ人」と言えるかどうかは検討の必要があるかもしれない。もっとも、3：7-8では「ユダヤ、エルサレム」から群衆がやってきたとあるので、すでに最初の段階から群衆はユダヤ・ガリラヤの区別をなされていないといえる。彼らはイエスの言行に驚き、不思議がる。エルサレム入城に当たっては歓呼の声で迎えるが、最後には祭司長たちに煽動されて（15：11）、イエスを十字架につけるよう要求する。群衆はイエスに対して基本的に賛同しているが、煽動によってイエスの十字架刑を支持したとされている。

イエスと「ユダヤ人」とのやり取りは対話形式になると前述したが、イエスの答えを受けた「ユダヤ人」たちの反応はほとんどの場合示されていない。つまり、「ユダヤ人」たちは変化することが求められておらず、「敵対者」という性格が固定されている。この意味で、「ユダヤ人」たちは平板（Flat）な性格の持ち主と見なされている。

ガリラヤおよび旅の段階では、指導者層として言及されるのは「律法学者」「ファリサイ派」である。エルサレムに到着した段階で「祭司長」が加わる。祭司長は受難物語では中心的な役割を果たしており、またその高い役職的位置づけからも、エルサレムの中心とイエスとが対立している印象を強く与えるようになっている。なおエルサレムへの旅の途中でのイエスの受難予告において「祭司長」が現れており、エルサレムにおける登場の先取りとなっている。

なお例外的に、12：34では適切な答をする律法学者が述べられる。しかしこの後、「もはや、あえて質問する者はなかった」とされ、これ以後イエスと「ユダヤ人」たちとの論争的対話は存在しない。適切な答は律法学者の内部における変化の兆しであるが、マルコはこの部分で、まるで「ユダヤ人」たちの変化を許さないかのように対話を打ち切っているようである。

「ユダヤ人」として登場する人物の呼称は前述の通りであるが、「群衆」「大勢」を除いて、基本的にはイエスに敵対する勢力として描かれている。著者の視点としてそのような姿勢が与えられているので、読者には先入見として同様の立場が与えられてしまう。それはイエスのことを知らない読者に対しては効果が顕著であろう。

しかし「群衆」については、長たちとは違った視点が与えられている。長たちは群衆を恐れているが（12：12, 14：2）、それは人々がイエスに賛同しているという点を明らかにしている。

Point of View

思想的な面からみると、「ユダヤ人」たちとイエスとの論争点は、ユダヤ教の教義や規定に関わる点である（罪の赦し（2：7）、罪人との食卓（2：16）、安息日（2：24）

など)。イエスの言動とユダヤ教の教えとが対置され、その相違が明らかとされる。

空間・時間という視点では、ガリラヤ・旅・エルサレムという場所の変化が見られるが、ガリラヤの場面においてすでにイエスを殺す計画が始まっており（3：6）、場所による違いは特に見受けられない。

心理的な面では、比較的早い段階から「ユダヤ人」のイエスへの反発が始まっており、読者は反発の意識を植え付けられていることになる。イエスからの「ユダヤ人」批判は受難予告（8-10章）を中心としている。イエスから議論を持ちかけることは稀である。

Plot

イエスの活動の当初から、敵対的な「ユダヤ人」が述べられている。最初に現れるのは2：6の「律法学者」である。続いて2：16では「ファリサイ派の律法学者」と述べられ、その後2：18以降では「ファリサイ派」として現れる。3：6では早くもイエスを殺す相談が始められている。この点は以後の物語の前提となる。その後、8：11で「イエスを試そうとして」という意図が語られ、またイエスからも「長老・祭司長・律法学者たちから排斥される」（8：31）との発言がなされることで、双方の対立が明らかにされる。

また「群衆」も当初から現れる。特に福音書の前半では奇跡物語が多く見られるが、それらに驚く者たちとして現れる。これはイエスに対する一般の人々の反応を示していることになる。

2-2) マタイ福音書

マタイ福音書における「ユダヤ人」の呼称は以下である。「律法学者」「ファリサイ派」「サドカイ派」「長老」「祭司長」「最高法院」「ユダヤ人」、また「群衆」「大勢」が見られる。

Structure/Form

マルコと同様、マタイにおいても「ユダヤ人」は対話形式の中に現れているが、多くはマルコと共通の部分である。ただしマルコの物語よりは全体的に簡略化されている。またマタイにはマルコほど奇跡物語等が少ないこともあり、イエスの言動に対する批判という形よりも、「ユダヤ人」からイエスに対する働きかけを行うほうが多く見られる。

Rhetoric

修辞技法として、マルコと同様のものが見受けられる。マタイよりもやや短くなっているものが多く、簡素化された印象を受ける。

Settings

「ユダヤ人」が現れる状況設定は、マタイにおいてはガリラヤ・エルサレム両方である。マタイにおいてはエルサレムへの旅という場面がごく短い、そこでは受難予告という形で「ユダヤ人」への言及がなされている。いずれも基本的にマルコに従っていると考えられ、状況設定の独自性はそれほど感じられない。

Characters

マタイで「ユダヤ人」に最初に言及されるのは5：20であるが、それはイエスの発言中であり、かつ「律法学者・ファリサイ派の義にまさっていなければ……」と必ずしも彼らを否定するものではない。しかし6章では「偽善者」という名称でおそらく「ユダヤ人」たちに言及しており、これは否定的な言及である。また7：28は「律法学者のようにではなく」教えた、ということで、これも必ずしも彼らをおとしめるものではないと思われる。なおここまでにおいて、「ユダヤ人」自身は実際に現れてきていない。8章以降に具体的に登場し、イエスと対話を行う。9章以降では、ファリサイ派が具体的な名称として頻繁に現れ、イエスとの対立の最前線に立ってくるが、これはマルコと同様である。当初はイエスの語りの中のみ現れ、後に具体的な人物として登場する。これによって、最初から（イエスを通した）価値が読者に与えられることになっている。

マタイにおける指導者層としての「ユダヤ人」は、まず「律法学者」「ファリサイ派」として出る（5：20）。ここではイエスの言葉の中であり、彼らの性格は直接には示されていない。マルコを資料としている部分では、マルコと同じ形で登場する。基本的には「ユダヤ人」たちは変化せず、イエスの敵対者という像である。マルコ同様、マタイにおいても平板（Flat）な性格の登場人物である。

マタイにおける特徴は、イエスが指導者層の「ユダヤ人」を評価している部分が見られることである。例えば8：19では、イエスに従おうとする律法学者が述べられる（ただしその最終的な評価については述べられていない）。しかしマルコに見られた適切な答をする律法学者（マコ12：34）はマタイ版には含まれていない⁹⁾ことを考えると、肯定的評価は偶然的なものであると見なすべきであろう。

マタイでは、イエスが「ユダヤ人」たちの内実を明らかにしている部分が多い。23章はその代表例である。非難という形で、「律法学者」「ファリサイ派」の二者について語られている。

エルサレムに着くと、マルコと同様に「祭司長」たちがイエスの敵対者として現れる。16：21の受難予告（ただしマタイでは1回のみ）において祭司長が現れているのもマルコと同様である。

なおマタイでは、「あえて質問する者はなかった」ことに至るきっかけは、メシアとダビデの子についての論争である。イエスの問いかけに答えられないために、質問が出ないという理由付けはマルコの場合(適切な答に引き続く)と大きく印象が異なっている。

Point of View

思想的な面での問題は、マルコと同様にユダヤ教の教義や規定に関する点であり、多くはマルコに由来する。ただし最初からイエスによって「ユダヤ人」を超えることが提案されている点(5:20)はマルコと異なる提示のされかたである。特にこれは、山上の説教の始めの部分におかれ、山上の説教の結びにおかれた「律法学者のようにではなく」(7:28)と対応していることで、イエスの教えが実際に彼らを超えていたことを明らかにしている。

空間・時間的には、19章までイエスはガリラヤを中心として活動し、その段階において「ユダヤ人」たちはイエスへの敵意をすでに十分に増している。共観福音書ではイエスの公生涯は1年間と見なされるが、短期間のうちにイエスが多方面に活動し、またそれに対する反発が大きくなっていったことが伺える。

心理的には、イエスから見た「ユダヤ人」たちの姿が描かれることで、読者にまず「ユダヤ人」たちへの特定の方向性が組み込まれる。その後論争場面が続くが、すでに一定の評価が方向付けられているため、それらの読み方はマイナスからの視点に基づくことになる。これは意図的と見なせる。

Plot

前述のように、マタイでは最初からイエス自らが「ユダヤ人」を評価するところから物語が始まっている。その後、マルコと同じ物語を使いながらユダヤ人との論争が続く(8-9章)、12:14においてイエスを殺そうとする意志が明らかにされる。

マタイ福音書での特徴はその構造とあいまって、「ユダヤ人」は集中して現れることである。5-7章ではイエスの言葉の中に登場するが、8-9章、12章、15-16章、19-22章という形にある程度まとめられている。基本はイエスの言行に対する律法上の疑義であるが、12:14ではイエスを殺す意図が現れ、16:1、19:3ではイエスを試そうとする姿勢、22:15では罠をかけようとする、と述べられ、筋が進むに従ってエスカレートしていく様が明らかである。最後には26:3で計略によってイエスを捕らえて殺す、という「ユダヤ人」たちの最終的な意図が確定する。多くのやり取りを踏まえたうえで敵意の高まりにより十字架刑という結果に至るといふ、読者に納得を促す筋書きとなっている。

2-3) ルカ福音書

ルカ福音書での「ユダヤ人」は、次のように呼ばれる。「ファリサイ派」「律法学者」「会堂長」「長老」「律法の専門家」。「群衆」「大勢」は他福音書と同様に見出される。

Structure/Form

共観福音書の三番目の書物であるルカ福音書においても、マルコを資料とした「ユダヤ人」との対話が見られる。しかしマタイがマルコを改変しているように、ルカもまた修正を加えている。ルカの場合、物語をやや長くする傾向がある（例えばマタ 9：1-8 // マコ 2：1-12 // ルカ 5：17-26）。またマタイと同様に、「ユダヤ人」からイエスに対する働きかけが多い。

Rhetoric

ルカで初めて「ユダヤ人」が出てくるのは 4：14-30 である。ここでは「人々」と書かれているが、安息日の会堂が場面となっており、広義の「ユダヤ人」と見なすことができる。ここで人々は最初にはイエスを誉めるが（4：22）、イエスの説教を聞いてすぐに憤慨する（4：28）。続いて 5：17 であるが、これはマルコの物語への改変、加筆となっている。ルカのエピソードでは、「ユダヤ人」たちが最初から場面にいると記されることが多い（5：17-26、6：6-11、11：37-54 など）。エピソードの最初と最後に配することで、場面に始めから参与していたことを告げ、エピソードの一部始終を見たことによって彼らのイエスに対する反応が引き起こされたことが明示されている。

またマルコと同様、対話が繰り返され、その程度が徐々にエスカレートしていく流れが見られる。

Settings

他の共観福音書と同じく、最初はガリラヤで、そしてエルサレムへ向かう旅の途中、またエルサレムという三つの箇所において「ユダヤ人」が登場するが、ルカでは比較的平均的に福音書の随所で現れている。彼らは常にイエスにつきまとうような形で現れており、これはマタイとは異なる扱い方であると言える。

Characters

ルカでの指導者層にあたる者たちは、マタイと同様まず「ファリサイ派」「律法の教師（律法学者）」として現れる（5：17）。かつ、彼らはガリラヤ・ユダヤ・エルサレム、つまりユダヤ全土からやってきたとされている。これは明らかに誇張であるが、イエス

の宣教の最初からこの両者、しかも全ユダヤから注目を集めていたことを表しているだろう。このエピソードはマルコでは律法学者のみが、しかもイエスの奇跡の後にその存在が明らかになっているが、ルカは明らかに脚色を加えていることが分かる。

またルカでは、イエスに対する反応を感情表現の形で述べていることが見受けられる。6:11 ではイエスの発言に「怒り狂う」。13:17 では反対者たちは「恥じ入る」。15:2 では罪人と食事をするに「不平を言う」(マタ 9:11 並行)。これらはマタイやマルコの叙述に対するルカの追加であり、指導者層の否定的姿勢をより明確に表している。

6:11 という比較的早い段階で怒りの態度が現れているが、マタイやマルコのようにすぐに殺意には向かわない。10:29 では自分たちを正当化しようとする。続いて敵意が現れるのは 11:53 であり、13:31 ではファリサイ派の人々が親切にも、ヘロデが命を狙っているという序言をするが、指導者たちの殺意は示されていない。その後、やっと 19:47 になって「イエスを殺そうと謀る」という記述が現れる。これはルカ独特の配置であり、いざこざを経て最終的に殺意へとつながるという点で、最初から殺意を示しているマタイ・マルコよりは自然な物語の展開になっている。

「群衆」の性格は基本的に他の福音書と同様であるが、反対者たちと同様、イエスに対する感情に関する表現が追加されている。4:15 では「皆から尊敬を受けられた」、4:22 では「皆はイエスをほめ」たと述べるのが人々(「皆」*pas*)の初出であり、イエスに対する高い評価が示されている。これは人々がイエスに高い評価をしていたのに対して指導者たちが否定的評価をしていたことを強調する効果をもっている。

Point of View

思想的には、マルコ・マタイと同様、ユダヤ教の教義や規定が問題とされている。ルカでイエスに反対する人が最初に現れるのは 4:16-30 であるが、ここでもまずイザヤ書が引用され、その実現についてイエスが語っている。特に、ルカの好む用語として「律法の専門家 *nomikoi*」があるが、「律法学者 *grammateus*」よりも「律法」という意味が強く出ている可能性があり、ルカが「律法」に視点を置いていたことを伺わせる。

空間・時間的には、イエスの宣教の間「ユダヤ人」が均等に現れることで、あらゆるところで常に争いがあったことを伺わせる。

心理的には、4章での人々とのやり取りにおいて既に抗争が産まれていることで、やはり最初からイエスと「ユダヤ人」との対立が示され、物語の方向付けがなされている。ただし最初の反対例は群衆であってユダヤ教指導者層に限定されていない、という特徴がある。これは他の福音書と比べると興味深い点であり、指導者に限らない多くの人た

ちが反対していた、という印象を与えるものとなっている。

Plot

ルカにおいて、イエスの公生涯として一般の人々に現れるのは4章である。最初は会堂で教え、尊敬を受けていた(4:15)。ナザレの会堂では最初誉められたが(4:22)、直後に憤慨され、崖から突き落とされそうになる(4:28-29)。このように物語の始まりから、イエスは死罪に付される可能性のあることが暗示されている。ただし具体的にユダヤ人指導層の殺意が現れるのは他の福音書に比して遅い(19:47)。ルカ福音書では、物語全体にイエスと「ユダヤ人」の論争が散らされており、論争は常に行われ、「ユダヤ人」の対応は徐々にエスカレートしていくことになる(Characterの項参照)。ルカにおけるプロットは整理されており、物語として少しずつ緊張感を高めていく構成である。

2-4) ヨハネ福音書

ヨハネ福音書における「ユダヤ人」は、以下の呼称によって呼ばれる。「ファリサイ派」「ユダヤ人」「祭司長」「議員」、また「群衆」「大勢」も使用されている。ヨハネ福音書では「ユダヤ人」が「ユダヤ人一般」と「ある特定のユダヤ人勢力」の二つで使われているようであるため、この項では前者を「ユダヤ人」、後者を「Ioudaioi」と表記する。

Structure/Form

ヨハネ福音書においても対話形式が基本である。ただしその資料は共観福音書とは異なっている。また対話そのものも共観福音書に比べて長く、一つの対話内でのイエスと「ユダヤ人」それぞれの発言数も多い。イエスが語り、それに対して「ユダヤ人」が返し、さらにイエスが返し、さらに「ユダヤ人」が返す、という、まさに「対話」の形に作られている。

Rhetoric

各対話は、間にほとんど状況説明を差し挟むことなく進むことが多く、対話そのものに大きな価値をおいているといえる。これはちょうど劇のような構成である。

また対話には繰り返しの手法を用いることで、一つの対話内での緊張感の高まりを形成している。言葉のやりとりが繰り返される中で「ユダヤ人」たちが激高していく様子が述べられている。

Settings

ヨハネ福音書では、イエスはエルサレムに三度入る。*Ioudaioi* との対話も、基本的にはエルサレムに集中している。11章はベタニアでのエピソードであるが、やはりエルサレム近傍である。つまり、ヨハネにおける *Ioudaioi* はエルサレムで活動する存在として設定されており、イエスがそこに行き対話を行っている。これは、イエスの話を聞きにガリラヤまでやってくる「ユダヤ人」について述べている共観福音書とは異なる状況設定である。

Characters

ヨハネ福音書の *Ioudaioi* は非常に通常、イエスに敵対的な人々と考えられていることが多い。ユダヤ人たちが迫害を始めたり (5:16)、殺そうと考えたり (5:18, 7:1) していることがその根拠となっている。そのような姿勢が *Ioudaioi* として述べられていることは間違いない。

しかしまた、ヨハネの「ユダヤ人」も必ずしも *Ioudaioi* のみではない。群衆についてはむしろイエスを信じる (ただしイエスからは信じられない) ものとして描かれている場合がいくつも見られる。このような点からは、ヨハネにおける「ユダヤ人」も一色に塗りつぶされるようなものではないことが伺える。*Ioudaioi* 以外の個別の登場人物についても、イエスに好意的に描かれていることが多い。それは *Ioudaioi* との対比を明確にするためであると推測される。

Point of View

思想としてはやはりユダヤ教の教義を問題としているが、ヨハネにおいては、ユダヤ教を超えるイエス、具体的にはモーセを超え、アブラハムをも超えるような存在としてのイエスを主張している。これはマタイにおける律法の徹底化というような方向とは異なった思想であり、特徴的な視点といえる。

空間・時間的に見ると、*Ioudaioi* はエルサレムを中心に活動し、イエスがそこに入出入りする、という形を取っている。また三回のエルサレム訪問により、徐々に *Ioudaioi* との対立が深められるように物語が進んでいく。

心理的に見ると、ヨハネで最初にユダヤ人が明確に¹⁰⁾出てくるのは宮清めである (2:13-22)。宮清めの結果は各福音書でさまざまであるが¹¹⁾、ヨハネはその直接の効果を説明しない。「ユダヤ人」たちの直接の感情は表現されておらず、むしろ 2:21-22 の地の文による説明が大事なように扱われている。

用語的に見ると、*Ioudaioi* という語による包括的な言及が重要である。これはヨハネ

福音書記者においては、*Ioudaioi* という語で言及される対象が特定されていたことを示している。また「ファリサイ派」も多く用いられており、ヨハネに馴染みのある語彙であることが伺える。それに対して「律法学者」への言及は見られるが、その数は共観福音書に比べるとごく少ない。またヨハネにおいては、「大勢 *polloi*」が「信じる *pisteuō*」とセットになる形で用いられている¹²⁾ ことも知られており、特に注意して用いられていることが伺える。

Plot

Ioudaioi は、ヨハネ福音書では宮清めで現れる。しかしその時点では、敵意はそれほど明確ではない。またエルサレムの大勢がイエスを信じたが、イエスは彼らを信じなかった (2: 23-25)。イエス自身の、群衆に対する否定的な姿勢が最初から語られている点は特徴的である。*Ioudaioi* たちがイエスを迫害し始めるのは 5: 16 からであり、安息日における癒しへの反応であった。さらに 5:18 では「殺そうと」という意志が明確になっている。このような最初からの殺意は、マタイやマルコに共通するものである。*Ioudaioi* との対立は論争を通して激しくなっていき、捕らえようとしたり (7: 30, 7: 44, 10: 39, 11: 57)、石を投げようとしたりする (8: 59, 10: 31-33) 動きが頻繁に見られる。これが最終的には受難物語に続いていくことになる。

3. 考察

3-1) 「ユダヤ人」という呼称

序でも触れたが、共観福音書における「ユダヤ人」(*Ioudaioi*) の用例は顕著に少ない。マタイ・ルカの 5 例の内、3 例 (「ユダヤ人の王」) はマルコに由来するものである¹³⁾。それ以外については、「ユダヤ人の王」(マタ 2: 2)、「ユダヤ人の間に広まっている」(マタ 28: 15)、「ユダヤ人の長老」(ルカ 7: 3)、「ユダヤ人の町アリマタヤ」(ルカ 23: 51) という用いられ方であり、単なる修飾語の域を出ていない。それに対して、「律法学者」(*grammateus*)¹⁴⁾ や「祭司長」(*archiereus*)¹⁵⁾、「ファリサイ派」(*Pharisaioi*)¹⁶⁾ は数多く見られる。しかし逆に、ヨハネ福音書では *Ioudaioi* の用例が非常に多く見られ、それ以外のものは少ないということが観察される。

このことから、「ユダヤ人」を表す言葉は、それぞれの福音書記者が読者に伝え得ると考えていた「ユダヤ人」像を示していると考えられる。共観福音書記者は「律法学者」が読者に理解されると見なした一方で、ヨハネ福音書記者は *Ioudaioi* がその役割を果たす語であるとして選択したのである。この点からみて、「ユダヤ人」という語そのもの

の意味はヨハネ福音書単独ではなく、共観福音書も含めた初期キリスト教文学全体からの考察が必要であるといえる。

3-2) 「ユダヤ人」指導者層の意図

イエスと論争を繰り広げるのは、おもに指導者層である。彼らはイエスに対して、群衆とは別の立場を取ることが述べられている（マタ 21：46、マコ 12：12、ルカ 19：47-48、ヨハ 12：19など）。イエスに対する敵意や殺意は、地の文で述べられている（マタ 12：14、マコ 3：6、11：18、ルカ 19：47、ヨハ 5：18など）。指導者層に対する福音書記者の見方が、イエスの十字架という結果から反映しているといえる。

また殺そうという意図の現れるタイミングは、福音書によってまちまちである。これもその意図が福音書記者の創作的な部分に多くを負っていると考えられる。指導者層に関する部分は伝承によるというよりも、福音書記者がそれぞれ自分の執筆意図に合うように地の文として配置したということがいえるであろう。

3-3) 「祭司長」の役割

「祭司長」は指導者層の一人に数えられるが、受難物語においてはいずれの福音書でも大きな役割を占めている。共観福音書ではイエスの連行や裁判を操る（マコ 15：10など）。ヨハネでは *Ioudaioi* がかなりの部分で取って代わっているとはいえ、その名前は見えている（ヨハ 18：3、19：5、19：21など）。受難物語に関する資料伝承が比較的固まったものであったことは、この点からも推測できる。受難物語より前に祭司長が出てくるのは権威に関する問答（マタ 21：23、マコ 11：27、ルカ 20：1）であるが、共観福音書に共通しているため、この部分もしっかりと伝承されていることが伺える。

このように「祭司長」に関する伝承がはっきりしていることと比べると、3-2) で考察した指導者層に関する福音書間の記述のぼらつきが目立つことになる。

3-4) 群衆の存在

いずれの福音書にも「群衆」「大勢」と呼ばれる、指導者層ではない人たちが現れている。彼らは共通して、最初はイエスに驚き賞賛し、イエスに追随するが、受難物語では指導者層に唆されてイエスを十字架に掛けるよう要求する。これらの人たちを歴史的に考察するのは難しい。福音書の記述から彼（女）らの実態を透かし見ることはほとんど不可能であり、福音書記者の意図が大きく反映していると見るのが妥当である。

記者の意図を受けたものであるとすれば、群衆はどのような役割を果たしていることになるだろうか。そうすると、当初は指導者層の意志とは関係なくイエスを信じ追従す

る者たちとされている。イエスが人々から支持されたということは繰り返し記されており、これは読者に対するイエスの評価を定めるための大きな参考点になるであろう。また指導者層との対比も明確となっていく。

しかし受難物語では、イエスを非難する側に立つ。マルコやマタイでは、祭司長たちが説得し、また煽動したことになっている。ルカやヨハネではそのようなことは記されず、群衆が自発的に十字架刑を所望したという記述になっており、このような部分での各福音書の差は福音書記者の考え方の違いと見るのが妥当であろう。

マタイ 27:15 は反ユダヤ主義の元となった言葉の一つであるが、群衆の描かれ方が福音書記者の意図に基づく以上、それは福音書記者の考え方であり、歴史的な群衆の意図を反映しているという考え方は困難である。

4. まとめ

本考察においては、四つの福音書における「ユダヤ人」についての記述を文学批評の方法を用いて検討した。結果として、各福音書における記述は統一されたものではなく、福音書記者（あるいは共同体）の意図を反映した創作的な部分が大きいことが判明した。もちろん伝承に基づくと考えられる内容等、一定の歴史性が福音書の背後にあることは否定できない。しかし現在われわれが所持している福音書の文面から、そのまま背後の歴史を読みとろうとする試みには十分な注意が必要である。

以上のことから、福音書に描かれた「ユダヤ人」の像は「歴史か創作か」という冒頭のテーマについて、「一定の歴史的内容をもとにしてはいるが、相当多くの部分が創作されたものである」という解答を提出したい。

注

- 1) マタ 5 回、マコ 7 回、ルカ 5 回、ヨハ 70 回。
- 2) 最近の研究としては、Raimo Hakola, *Identity Matters. John, the Jews and Jewishness*, Suppl to NT 118, Leiden: Brill, 2005; Lars Kierrspel, *The Jews and the World in the Fourth Gospel. Parallelism, Function, and Context*, WUNT II 220, Tübingen: Mohr Siebeck, 2006 などを参照。
- 3) 概説として、*The Blackwell Companion to the New Testament* (ed. David E. Aune), Wiley-Blackwell, 2010 がある。
- 4) 私がこの手法を用いる基本的動機は、「現代人が聖書テキストを読むことにどのような意味があるのか」、「現代人が聖書テキストから何を受け取りうるのか」という問題意識である。言い換えれば、聖書テキストは、それを初めて読む者や聖書に関する歴史的知識を十分に備えない読者に対して、どのような内容を伝えることが可能であるの

か、という疑問である。

- 5) Resseguie が挙げている項目である Rhetoric, Setting, Character, Point of View, Plot を基本とする (J. L. Resseguie, *Narrative Criticism of the New Testament: An Introduction*, Grand Rapids: Baker Academic, 2005)。これらは物語批評の基本項目と考えられる。ただし彼の述べる Rhetoric は Structure や Form を含んでおり、この点は分離した方がより明瞭であると思われる。
- 6) Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Deutsche Bibelgesellschaft, 1993.
- 7) マルコにおける登場人物の考察については、David Rhoads and Donald Michie, *Mark as Story: An Introduction to the Narrative of a Gospel* (Philadelphia, PA: Fortress, 1982), pp.101-136 を参照。特に、ユダヤ教指導者層については117-122頁、群衆については134-5頁を参照。
- 8) マコ 8 : 31, 10 : 33, 12 : 35, 12 : 38。
- 9) これは本来の伝承が短い方 (マタイ版) であったのか、長い方 (マルコ版) であったかによって、最終的な判断も変わってくる部分である。マタイが削除したのか、マルコが添加したのかによって、それぞれの福音書記者の姿勢を伺うことができる。ただし本論考では伝承という歴史的な面は扱わない。
- 10) カナの婚礼 (2 : 1-11) もユダヤ人たちの行事と言えなくもないが、明確に書かれていないので外して考える。
- 11) マタイ (21 : 12-13) はその結果について特筆せず、マルコ (11 : 15-18) は直接に指導者たちの殺意の芽生えを説明し、ルカ (19 : 45-48) は宮清めも含めたイエスの言行を指導者たちの殺意の原因とする。
- 12) 2 : 23, 4 : 39, 4 : 41, 7 : 31, 8 : 30, 10 : 42, 12 : 42.
- 13) マタ27章 // マコ15章 // ルカ23章の用例。
- 14) マタ22回、マコ21回、ルカ14回、ヨハ 1 回。
- 15) マタ25回、マコ22回、ルカ15回、ヨハ21回。
- 16) マタ29回、マコ12回、ルカ27回、ヨハ20回。